

転職先の会社で

再会し

オフィスで

話される

自分に自信がなくて

逃げるように

別れて

しまった

かつての恋人と

執着

わから

セックス





「は、初めまして。本日入社しました。双葉春奈です。慣れない業務でご迷惑をかけてしまうかもしれませんが：精一杯頑張りますのでよろしくお願いしま………っ!？」

以前務めていたブラック会社から転職して出勤初日。オフィスの会議室で上司として紹介された男性を前にして、ビシリと石のように固まってしまった。

挨拶の途中、急に言葉に詰まった私を見て隣に立つ人事の担当者が怪訝そうな顔をして

「：双葉さん？どうかされました？」

と聞いてくる。

予想外の出来事に正直頭の中は真っ白で。だけど、このままだと

初日から変な印象をもたれかねない。喉を引きつらせながらも眼前に立つ上司に言葉を絞り出した。

「い、いえ…失礼しました。少し、緊張してて…よろしくお願いします」

「ふ、そんな硬くならなくていい。主任の一ノ瀬だ。これからよろしく。…といっても俺が上司でびっくりしたか。久しぶり…五年ぶりぐらいか」

「……っ！ええ…、お、お久しぶりです……一ノ瀬先輩」

私の事なんてもう忘れているかと思ったのに。あの頃みたいに気さくに声を掛けてもらい素直に驚く。

穏やかな笑みを浮かべながら、私を見て懐かしそうに目を細める上司…もとい、かつての恋人、一ノ瀬先輩にぎこちなく返事をした。

——自分に自信がなくて逃げるように別れてしまったかつての恋人と転職先の会社で再会しオフィスで執着わからセックスされる話——

「あれ？一ノ瀬主任と双葉さんはお知り合いでしたか？」

私たちのやり取りに、入社初日の社内案内してくれていた人事の担当者、山本さんが少し驚いた顔をする。

知り合いどころか元カレです。なんて正直に答えるわけにはいかない。どう説明しようか少し口籠っている私を見て、先輩が口を開いた。

「ああ、そうなんです。大学が一緒で。…と言っても双葉さんは一学年下だったんですが。サークルの後輩だったんです」

「あつ、そうだったんですか。それはまた…こうして職場で再会されるなんて偶然ですね！」

「はい、…本当にそう思います」

そう答えながら先輩が私の方に視線を向ける。表情は変わらず笑みを浮かべているはずなのに、一瞬、瞳の奥にどこか鋭さを感じ取れて、その眼差しに背筋にゾクツと冷たいものが走る。

(……………っ、今のは？気のせい…？)

「双葉さんにはこれから一ノ瀬主任の補佐として動いてもらうことになります。慣れない環境で最初は大変かもしれませんが…でもか

つての大学の先輩が上司でしたら安心ですね」

「っは、はい。そう、ですね」

「はは、安心かは分かりませんが……。でも、こうして一緒に働くことができて嬉しいよ。このところ仕事量が増えてきてさ、細かい部分をサポートしてくれたら助かる」

かつての元カノが部下になってしまったにも関わらず、気さくに話しかけてくれる先輩にほっと安堵する。やはり先程の視線は気のせいだったのだろう。

先輩の言葉に山本さんがうんうんと頷きながら、しみじみと呟いた。

「広報部、一ノ瀬主任の企画力のおかげでますます好調ですもんね。普段とんでもない業務量をこなされて……。いつも涼しげに仕事してますけど、正直体を壊さないか主任の部下たちも心配してましたよ」

「そんな事ありませんよ。休む時は休んでますし」

「またまたご謙遜を。補佐役を増やすことで、もう少し一ノ瀬主任の負担が軽減できればと思つての今回の採用です。業務は徐々に覚えて頂ければいいので、双葉さん頑張ってくださいね」

「はい。ありがとうございます」

「それでは私はここで」山本さんはそう言つて人事部に戻つて行つた。

山本さんが去り、会議室に先輩と二人っきりの状況に少し…気まづさを覚える。

あんな別れ方をしてしまつて、先輩は怒つてないのかな…なんて体を硬くしていると

「改めてよろしくな。それじゃ、これから早速広報部のメンバーに紹介するから着いてきてくれ」



と促される。その表情から特に怒りは読み取れず、まるで何も気にしていないかのようだった。

会議室から出ていく先輩の後に続きながら、ぼうっとスーツを着た、広い背中を見つめる。

（：そうだね。もう五年も経ってるんだし：あんな人気者だった先輩からしたら、少しだけ付き合った私の事なんて気にもとめてないか）

思わぬ再会にこれから一緒に仕事をする事に少し不安だったけれど、先輩のあっけらかんとした態度に救われた。

お互い過去のことは触れずにこのまま上司部下として過ごしていくのだろう。心臓の奥がチクンと小さく痛むのを無視しながら、こっそり先輩を見上げた。

少し茶色がかった髪。整った容姿。学生時代より精悍さと大人の色気が増しているその姿に思わず見とれてしまう。

「……ん、どうかしたか？」

「い、いえ、なんでもありません」

まずい、懐かしさにまじまじと見つめすぎてしまった。危うくバレそうになって慌てて顔を逸らす。そんな私の様子に「そうか？」と首を傾げてまた歩みを進める先輩は五年経っても相変わらずかっこいい。

一緒に歩きながら私はぼんやりと「あの頃」を思い返していた。

いつも周りに人が集まる、私からは程遠い雲の上の存在。先輩への印象そんな感じだった。

「ねえあなた、テニス！私たちとテニスやらない!?」

「え、えっと、私ですか？すみません、やったこと無くて…」  
「未経験大歓迎！とりあえず体験やろ！」

大学生になってこれからの新生活に胸を踊らせてた私は、新歓で勢いに押されてあれよあれよという間にテニスサークルに所属することになった。といっても週に一回程度集まって一応テニスをし、その後の飲み会がメインみたいなサークルだったけれど。

そこにいたのが一学年上の一ノ瀬先輩だった。人数が多かったの  
で、来る人は来る。といったゆるい雰囲気  
のサークルだった。先輩も顔を出すのはかなり稀で。

「おー、久しぶり。顔出しに来たぞ」

「あつ、一ノ瀬！お前もつと活動来いよ。会えなくて寂しかったぞ」

「ははっ、なんだそれ。いや、レポートが時間かかってさ」

「あつ、あの教授の？やばい、俺まだ終わってねーや。ちよつとよく分かんないところあつてさ……」

「一ノ瀬くん、久しぶり。え、なんの話し？」

「あつ、一ノ瀬じゃん！」

それなのに先輩が来ると、その周りに自然と人の輪ができて、空気がいつも以上に明るいものになる。

そのルックスももちろんだけど、明るくおおらかな話口調だとか、相談を求められると的確なアドバイスをしてくれるとか……皆そうだったところに惹かれていたんだと思う。

（先輩が来てからあつという間に人が集まった……いつ見てもすごいなあ……）

私もその一人で。でも、その輪に入っていく勇氣はない。あんな人気者を前にしたら緊張して上手く話せなさそうだし、何より私なんかよりも綺麗で可愛い女の子たちが親しげに話しかけているのを見て気が引けてしまう。

（まあ、私の事なんて認知してないだろうし。話し掛けに行っても、困らせちゃうよね）

そう考えながら、遠い存在としてこっそり眺めるのが精一杯だった。



「……ふう、備品はこれでOKかな」

その後、先輩とは何事もないまま私は大学三年生になった。

その日はサークルの部室で一人、備品のチェックをしていた。ボールの数に過不足がないか確認を終え、元の場所に戻す。まだ他のメンバーが来る時間ではないので、それまで軽く部室の掃除をしようかと後ろを振り返ると。

「あれ、まだ誰もいないかと思った」

「え：一ノ瀬先輩!？」

出入口に思いもよらない人物が立っていた。

「そんなに驚かなくても。双葉だよな？いつもこうやって早くきて

たのか？」

「……すみません。いつもではないですけど……やれる時には始める前に軽く備品のチェックとか掃除をして」

「えっ、そうだったのか？ 気が付かなくて悪かった。ありがとうな」  
「いえ、そんな、やりたくてやってるだけなんです。こうして細かい事してるのが好きですし」

話したことはほとんど無いはずなのに、名前を覚えてもらえてた事に驚く。

お礼を言われ嬉しさを感じつつも、地味なやつだと思われただろうな、なんて考えながらへらりと笑った。

「……」

「……？ 先輩？」



しかしそんな考えとは裏腹に、先輩は少し驚いたような……真剣な表情で私を見つめていた。思っていた反応と違って目をぱちくりさせる。その綺麗な瞳にじっと見つめられて心臓が跳ねつつも、何を考えているか汲み取れず首を傾げる。

私が困惑していると、ふ、と表情を和らげて先輩が口を開いた。

「……そっか。でも、これからは当番制にしよう。後で今の代表に言っておくから」

「えっ、で、でも勝手にやってただけで……」

「だめだ。こういうのはちゃんと皆でやらなきゃいけないだろ？……  
といってもほとんど顔出さない俺が言うのも説得力ないか」

「……っふ、ふふっ。そうですね」

「って、こら、肯定するなよ」

これがきつかけだった。

先輩は四年生になっていたけどよくサークルに顔を出して私に話しかけてくれるようになり、建物内や学食で偶然会うことも多くなった。

学外でも二人きりでご飯に誘ってくれた。最初はなぜ私なのか分からず：萎縮してよく味が分からなかったけど。

「週末暇か？買い物に行きたくて、付き合ってくれないか？」  
「来週双葉が好きそうなイベントやるみたいなんだ。一緒に行かないか？」

なんてご飯以外でも、ちょっとした遠出やイベントに私を誘ってくれ、優しくエスコートをしてくれた。

最初はあるたぎこちなさも徐々に解けて心の底から楽しいと思えるようになった。

そんな日々で普段は見れない先輩の一面をたくさん知ることがで

きて……以前よりもっと、先輩に惹かれていくのを自覚していたある日。

「もう気がついていないかもしれないけど……春奈のことが好きだ。俺と付き合ってくれないか」

夕方。二人で海で夕日を眺めていたとき、先輩がじっと私を見つめて言った。

真剣な声色に、ヒュッと小さく息を飲む。

今までの先輩の行動からしてもしかしたら……？と考える時もあった。そんな考えが浮かぶ度

（あの人気者で……女の子からの誘いも引く手あまたであろう先輩が、私を好きになんてなるはずないよね……）

と無理やり打ち消していた。

「…っ、私なんかいいんですか？」

ドッキリや罰ゲームではないだろうか？先輩がそんな不誠実な事をするはず無いと分かっているのに、つい卑屈な言葉が出てしまう。

「なんかって言うな。春奈がいいんだ。好きだよ。あの時、部室で初めて話した時から」

そう言って私をぎゅっと抱きしめてくれる先輩にじわりと視界が滲む。先輩の広い背中に腕を恐る恐るまわしながら、こくと首を縦に振った。

「っ…、わ、私も、一ノ瀬先輩が好き…好きでっ…っん、んんっ

……ちゅ、ふ……」

返事の言葉ごと先輩の唇に飲み込まれてしまった。優しくも強引なキスに頭をぐつぐつと沸騰させながら、そっと目を閉じてその熱に身を委ねた。

（あの頃は本当に幸せだったな。憧れの先輩と付き合えて、毎日が楽しくて……）

そんな昔の事を思い出しながら感傷に浸る。

他人から見たらありきたりかもしれないが、私にとっては大切な馴れ初めだった。

あれから半年くらいお付き合いは続いた。先輩の私に対する手つき、眼差しからいつも深い愛情を感じられて、大事にされているのが痛いほど伝わってきた。……えっちの時はなぜか少し意地悪だったけど。そんなところも好きだった。

傍から見たら至って順調な関係だったと思う。——でも、先輩の卒業が近付いてきた頃。私は逃げるように先輩の元から去ってしまったのだった。

「一ノ瀬主任、言われてたデータの作成終わりました。念のため、別資料も取引先ごとに準備してあります」

「お、そこまでしてくれたのか。……すごいな、助かった。初日からしっかり働かせて悪い」

「いえいえ、これくらい大丈夫です。他に出来ることはありますか？」

「……いや、今日はもう平気だ。ありがとうな」

一通り部署の人たちに挨拶を済ませ、一日先輩の指導のもと業務を覚えていった。新しい仕事はまだぎこちないけど、先輩の教え方が分かりやすく、なんとかやり遂げることができてほっと胸を撫で下ろす。

「……ああ、そうだ。渡してた資料を片付けてからでいいから、こ

の後第二会議室に来てくれないか？初日の面談をするから」

「あ、はい。分かりました」

そう言つて先輩は席を立っていった。

あまり待たせる訳にはいかないので、私も自分のデスクに戻り手早く書類をまとめていく。

（一日あつという間だったな……。最初先輩と再会した時はどうなるかと思つたけど：気にせず接してくれて、よかった：）

今日一日体に変な力が入っていたのか、全身が凝り固まつて軽く伸びをする。

私と付き合っていた事は先輩にとって：とくに過去の話なのだろう。業務中も特に触れることはなく、ただの上司部下として話してくれた。



この調子でこれからもなんとかやっていけるかも。なんて思いながら資料を定位置に戻し、廊下に出て会議室を目指す。

（あれだけ人気者の先輩だもん。きっと今はもう素敵な他の女の子と付き合って……うん、なんならもう結婚してるかもしれない。それでもいつか……先輩はもう気にしてもないかも知れないけど……いつか、あの時のことちゃんと謝りたいな……）

初日だけど、事前に場所を教えてもらってたお陰でスムーズにたどり着くことができた。扉の前に立ち、ノックをしようとした瞬間。

「ひゃっ……!？」

扉が開いて、隙間から伸びてきた手にガシリと腕を掴まれる。突然のことに小さく悲鳴をあげると、そのまま強く手をひかれ室内に

引き込まれてしまった。

「い、一ノ瀬先輩…!？」

「その呼び方懐かしいな。……なあ、……どうしてあの時俺から逃げ出したんだ？」

ガチャリと鍵が閉まる音が聞こえた。

何が何だか分からないまま、体を会議室の壁に押し付けられる。先輩と壁に挟まれ身動きができない。突然の行動に驚いて、つい昔の呼び方をしてしまった。

「ど、どうされたんですか？面談は…」

「話を逸らすな。なんで一方的に別れを告げていなくなったんだって聞いてるんだ」

いつも穏やかな笑みを浮かべてる先輩が、今まで見た事ない、怖い表情をして、私を見下ろしてくる。怒気を含んだ、這うような声に背筋が凍りついた。

「……そ、それは……先輩のせいとかではなくて、私の問題で……」  
「それじゃ答えになってないだろ。……卒業間近に、別れて下さい。すみません。ってメッセージだけ送られてきて、俺が納得したかと思うか？」

「……っ、ご、ごめんなさい」

「返信も無視されて、スマホの番号も変えられて……サークルにも全く来ないで、卒業の日まで徹底的に俺に会わないように避けてたよなあ」

「………っ」

先輩の言う通りだ。一方的に別れのメッセージを送り、学内でも

先輩に会わないように徹底的に避けた。私のアパートも知られていたので、親に節約したいからと理由をつけて退去し、実家から大学に通うようにして。

あんな不義理な別れ方をしてしまったのだ。やはり先輩が気分を害していたとしても当然のことだと思う。甘んじて怒りを受け入れようと瞼を固く閉じた。

「なあ、どうしてだ？」

「……っ」

「……言わないか？……は、そっか……」

「先輩？……わっ」

突然、体をひよいと抱えられ、会議用の机の上に押し倒された。先輩が私の上に覆いかぶさり、体の上に影を落とす。

てつきり、なじられるかと身構えていたので予想外の体勢に頭が

パニックになった。

「正直に話すまで、やめないからな」

「……ひゃ、…っ♡……ふ、ふう…」

耳元にじっとり吐息と共に囁かれ、ぴく♡と体が跳ねた。先輩の掌が太ももをゆっくりと撫でていく。

「ちゅ、…ふっ……」

「は、なんで、せんぱい…っ、あ……っ、やめてください…」

「お前耳弱かったよな。こうして……ちゅ…唇でふちをなぞってるだけで体ピクピクさせて」

「…は、……はあ♡」

「……その可愛い声も……ちゅ、ちゅ♡この薄い耳たぶも懐かしい」

「……っ、……あ……♡」

「それから……れろお……♡くちゅ……♡ぴちゅ……♡……ふ、舌で、耳全体を……たっくさん、舐られるのが好きなんだよな」

「は、はああああ……っ♡……っ♡だめ、先輩、だめえ……っ♡どうして……っ」

先輩の熱い舌が耳をぴちや♡ぴちや♡と舐めまわす。頭の中にえっちな水音が響いて、背筋がゾクゾクゾクッ♡と震え、どんどん考えることが出来なくなってきた。

どうして先輩がこんなことをするのか分からず、思わず声に出してしまう。

「どうして？本当に分からないのか？」

「……っあ、………？」

私の言葉に、先輩は顔をあげ低い声で問い詰める。弱い耳を舌でねっとり責められ頭が全然回らず、きょんとしている私を見て先輩は自傷気味に薄笑いを浮かべた。

「俺がもうお前を過去の事って割り切って……気持ちが残っていないなんて思ってたか？」

「……………」

凶星を突かれ、何も言えなくなる。

だってあれから五年も経ってて。先輩みたいな人がフリーなら途切れることなく女の人が寄ってきたことだろう。

半年付き合っていただけの、ぱつとしない私の事なんてとつくに忘れていると思ったのに。

「五年間忘れたことない。卒業した後も後輩に連絡先持っていないか

聞いたけど、誰も知らなくて……」

「先輩……」

「だから今日お前と再会してから思った。……ぢゅ♡絶対逃がさないって。……ずっとこうしたくて、たまらなかった」

「……っふ、う♡」

先輩の怒気を含みつつも悲痛さを滲ませる声色に、申し訳なさで胸が軋む。私と別れても先輩は特に気にもとめないだろう、なんて勝手に考えてた。そんな風に思わせてしまったなんて。

なんて謝ったらいいか分からないでいると、また耳元に唇を寄せられる。

「また逃げられたらかなわないからな。何でもないような態度とって、お前を油断させて……ん」



ぢゅっ、ぢゅ~~~~~♡

「はああ……っ♡あぁ~~~~~……♡ひっ……♡ぱくって耳、……っふ♡口で含んで……ぢゅ~~~~って、す、吸われちゃうぅ……っ♡♡」

「……ぢゅっ♡……っはあ、今日一日、ずっとタイミング見計らってた。二人きりになれる機会を。……って聞こえてるか？」

「はぁーっ♡あ、はぁっ……♡」

散々舌で舐られて吸われて。くたりと全身の力が抜けて、机に体を預ける。

耳だけでこんなに感じてしまうなんて。元々敏感だったけど……五年ぶりの刺激と先輩のせいで余計反応してしまう。

「……昔より敏感になってるな。……この五年の間にほかの男と

付き合ったりしたか？」

「……………っ、い、いえ……………」

「ちゃんと答えろ。俺と別れてから、他の男に全身まさぐられて。

……………お前のすぐとろとろ汁が溢れてくる ”ここ” にちんこ突っ込まれてズボズボかき混ぜられたかつて聞いてるんだ」

「あっ、あぁっ……………!?!?♡♡は、あっ♡急につ、おまんこに指、入ってえっ♡やだっ♡やだ、やだぁ……………♡あ、指入れないで……………♡」

スカートをたくしあげられて、先輩の綺麗な手がパンツの隙間に差し込まれた。

耳への愛撫で、どろお……………♡とえっちな汁を垂れ流していたそこは突然のことにも関わらず、じゅぷん♡と容易に先輩のゴツゴツとした男らしい指を飲み込んでしまう。

「耳の刺激だけでこんなに濡らしたのか？触ってもないのに、簡単

に俺の指啞えこんでるぞ」

「……………っ、だ、だって、先輩が…耳虐めるからあ……………っ♡」

「だからだとしても感じすぎだろ。……………中うねって、膣が指に絡みついてくる……………」

「……………っ、う、ぐう……………♡」

「はっ、これからめちやくちやに指抜き差しされて、弱いところいっぱい擦ってほしい……………って動かされるの催促してるみたいだ。他の男にもこうやっておねだりしたのか？」

「だ、だからちが……………っ」

否定しているのに先輩は信じてくれない。

私も先輩と別れてから、前向きに恋愛をする気持ちになれず、それから誰とも付き合っていないのに。

……………時々、体が疼く夜は自分で…お、オナニーして発散させてたけど。体の関係を持った人なんていなかった。

くちゅ♡くちゅ♡ぐちゅ♡♡♡

「ナカ火傷しそうなくらい熱っついな。……指ちよつと動かすだけで……聞こえるか？ぐちゅぐちゅってまんこからえっろい音出してる……」

「……………っあ♡は、あぁっ……………♡は、はい♡おまんこのナカ、先輩のゆび、……………動いて……………♡」

「春奈は耳も胸もまんこも全部弱かったけど。特に……………“ここ”指をくって曲げて、押されるの大好きだったな」

「んぁぁっ！♡そ、そこはぁ……………♡」

しっかりと覚えられていた私の弱いところを、指で軽く押された。その刺激だけで体に甘い電流が走り、腰を浮かせてしまう。

「ふ、いい反応……。今までの男はちゃんとここ、こうして手マンしてもらえたか？」

「い、いやあぁっ♡……ん、ふぐっ♡そ、そんな、そこばかり……っ♡触らないでえっ……♡♡」

「二本目の指もすんなり入った……。これで弱いところ、ごしごし♡ってたくさん擦ってやるからな」

「そんな……っ♡い、いけない……っ♡そ、それされたら……すぐイっちゃいますからぁ……♡♡」

指を増やされ、これから襲いかかるであろう刺激に思わず腰を引いてしまう。

そんな私の動きを許さないとで言わんばかりに、先輩のもう片方の手が肩をがっちり掴んで身動きを取れなくさせてしまった。

「こら、動くな、よっ」

「ひい……………っ♡♡♡」

先輩の二本の指が弱いところを挟み込むようにしてごり、ごりと擦り上げてきた。

ただでさえ敏感なところにそんな強い刺激を与えられ、口から悲鳴のような声が漏れる。

「ちゃんと逃げずに快感を受け止めろ。ぐちゃぐちゃの変態まんこ、手マンされて気持ちいいな？」

「あっ、あっ、あ~~~~♡て、手の動き、はやくなってるゆ…っ♡」

「さっきよりも水音増して、……………はっ、まんこずっとナカひくひくしてる。ほら、ちゃんと気持ちいいって言え」

「……………♡~~~~き、きもちいい…♡先輩の指で、…っ♡弱いところごちゅごちゅってされて……………あっあっあっ♡きもちいい、ですう

うっ♡」

ぶちゅ、ずちゅ、ずちゅうつ♡

先輩が手を抜き差しするたびに、おまんこから淫靡な音が鳴り響く。

太い指が膣のヒダを押し開いて、無遠慮にぐずぐずに濡れそぼったナカをかき混ぜられてしまう。

「…………っ♡ひ、ひう…………っ♡も、もうだめえっ…♡いく、いきそ…………♡あっ、あっ…………」

「もうか？相変わらず雑魚まんこだな。入社初日に会議室でイッていいのか？」

「…………っ！♡」

その一言にハツとした。先輩に流されてとろとろにされてしまっているけど、今日は出勤初日でここは会議室だ。

皆が使うこの部屋でイってしまったら、これからこの会議室を使う度に思い出して…きつと仕事どころではなくなる。

「っ、~~~~~♡」

「お、イクの我慢してる。は、健気で可愛い。……まあ、意味ないけどな」

ごりゅっ♡ごりゅっ♡ごりゅっ♡♡♡

「あっ♡あぁ~~~~~っ!!♡♡」

下腹部に力を入れて快感を逃がそうとしたのに、無情にも先輩の指がさつきよりも強い力で小刻みに弱いところをこすり上げてきた。



腰が上がって、口をパクパクさせてしまう。

「これされると堪えないだろ。好きだったもんなお前」

「あっ~~~~♡これだめ、きもちい……♡我慢できないっ……♡お、おまんこ、きちゃううぐっ♡♡」

「いいぞ。会社で手マンされて、無様イキしろ♡ほらっ、いけ♡いけっ♡♡」

「は、あ~~~~♡♡♡っ♡♡♡♡♡会議室でえ、っ、おまんこアクメするぅ♡♡♡イクイグっ♡♡♡♡♡いっ………、~~~~♡♡♡」

ビグッ♡♡♡ビクビクビクッ♡♡♡

最後、いっそう強く指でごりゅぐっ♡と擦られて体を弓なりに反らして呆気なく絶頂した。

心臓がばくんっ、ばくんっ、と脈打ち、絶頂の深さを思い知らさせる。

「はーっ♡はーっ♡」

「ははっ、すごいイキ方したな」

「……………っふ、うう…♡」

荒い呼吸を繰り返す私を見下ろして、先輩が楽しそうに笑う。瞳の奥がキラキラとして、まだこの行為が終わらない事を指し示してた。

「せ、先輩、あの……………っひゃあ!？」

先輩がストラックスの前を寛げ、ベチンとおちんちんを、お腹に叩きつけてきた。

先端から少しえっちな先走りがもれ、ビキビキといきり立つそれに、小さく息を飲む。

(…………っ♡五年ぶりの…、先輩のお、ちんちんが♡♡あんな大きいの入れられたら、すぐイカされちゃう…………♡♡)

「何今更驚いてるんだ？このままセックスするに決まってるだろ？」

べったりと愛液がついた下着もずりりと脱がされる。まるで当然のような口調に、有無を言わす気が無いことが分かってしまう。

「で、でも、ここっ会議室で」

「だな。だけど、さっきまであんあん喘いで手マンイキしてた奴に説得力はないなあ」

「…………っ」

「お前のナカがほかの男のちんこを咥えこんでたかと思うと……はっ、耐えられない。……今すぐ俺のちんこ突っ込んで、上書きするから……、っな」

ずっ、ずぶぶぶぶ♡ずりゆうっ………♡♡

「だ、だから、そんなことしてなっ……!?っ、ああ~~~~♡♡お、おちんちん、……っ♡入ってえ……っ♡入ってきたあっ………♡♡」

再度否定しようとした瞬間、ゆっくりと先輩のおちんちんがおまんこに入ってきた。ミチミチと太くて熱いものが、ナカを掻き分けて押し上げてくる感覚に喉が震える。

「……っ、ナカ、締まるっ。あゝ、…お前とまたこうしてられるなんて……夢みたいだ」

「ひゅ…っ♡一ノ瀬せんぱい…………っ♡」

「……つきゅ〜〜〜って俺のに絡みついてきて……熱烈な歓迎、だっ」

ずっ、ずっ♡ずちゅ♡ずちゅっ♡♡

「あぁっ♡ま、まだ動かさないでえっ……♡まだ、おちんちん慣れて、っないからぁ……っ♡」

「まだ？ナカはもっともっ♡って引き込もうとしてくるけどな。……っは、昔以上にえろくなって…そういうの、誰に仕込まれたんだ？ん？」

「ひ、ひゅっ♡仕込まれてなんて……っ♡」

「はぁ？だったらなんで、こんなにすぐっ、ぐずぐずになるんだっ」  
「し、しらにゃ……っ、ふ、ぐぐぐっ♡」

どちゅんっ♡♡と怒ったようにおちんちんを叩きつけられ、腰がガクガク震えた。

先輩の誤解を解こうにも、快楽にのまれて言葉が紡げない。

「あゝゝゝ♡あ、ひ、うづっ……♡」

「は、まだ動かすなって言う割には、っ気持ちよさそうだな」

「だ、だって、五年ぶりの……っ、あ♡先輩のおちんちんっ、う、うれしくて……っ♡」

「……………っ！」

「ひゃ、ああああっ♡♡そこだめっ♡」

散々指で虐められた弱いところをまた、先輩のおちんちんがごり♡ごり♡と抉ってきて、脳がびりびり痺れる。

「ま、また弱いところおっ♡イったばっかりで、あ、ひっ……♡敏

感なのにつ♡おちんちんで、トントンしちやつ…♡あ、だめ、うぐ  
~~~~~♡」

「っはあ、…あー、とろとろに溶けてるおまえの顔…：…っ、可愛い…、会社でこんなに乱れて…：…おい、また太もも痙攣してきたぞ。つまたイクのか？」

「…：…は、い♡っあゝ♡い、イきます♡よわよわおまんこ、すぐイってごめんなさいいっ♡」

イきそうと訴えるも動きは緩まず、おまんこに容赦なく熱いおちんちんが打ち付けられる。

体の底から込み上げてくるものを感じつつも、ただただ喘ぐことしか出来ない。

「ふ、ぐっ♡…：…っだめ、もうイクっ♡ゝゝゝまたイグっ…：…：…ん、っ!？」

その時。動きがピタリと止まり唐突に先輩の手で口を塞がれた。もう少してイケそうだったのに……！お預けにされて子宮がキュン……♡と切なく疼く。

（な、なんで……っ♡あと少して……イケたのに……っ♡♡）

「ふ、んぐっ……♡」

「しー、声おさえろ」

「っ……？」

イケないのがもどかしくて、つい腰をヘコヘコ動かしてしまう。先輩の目線が会議室のドアに注がれているのに気が付き、頭にはてなマークを浮かべて言われた通り声を潜めた。よくよく耳をすませると、何やらドアの外に人の気配がして……ドキッと心臓が縮む。



「あれ、第二会議室ってどっかの部署が使ってる？さっき中から物音がしたんだけど」

「使ってるんじゃない？でも予約入ってたっけ？」

二人組の女性の話し声。恐らくほかの部署の人たちだろう。

さっきまで快樂に溶けてどろどろになっていた頭の中が、一気にクリアになる。

「……………」

「どうする？ほかの会議室使う？」

「うーん……。ちよつとここでまっけて、予約もう一回見て来るわ」

どうやら、私の声までは聞こえてなかったようだった。けど、先輩が口を塞いでくれなかったら、流石に危なかっただろう。

心臓をバクバクさせながら必死に息を潜めて先輩を見上げると、

恍惚とした表情で私を見下ろしていた。

ギリリとした眼差しに嫌な予感がして、腰を引こうとしたその時。あろうことか、とん：♡とナカに入ったままのおちんちんが動き出した。

「……………っ!?!♡ふ、ん、くくく♡せ、せんぱい、だめ……………っ♡こ、声でちやいますから……………っ♡」

「頑張って抑えればいいだろ?……………ちゃんと歯食いしばって、我慢しろ……………。そうじゃないと、中でっ、何してるか気づかれちゃうな……………?」

「そ、そんな…っ♡ひっ~~~~~~~~っ♡」

(ど、どうして……………っ♡おまんこ、トントン止まらないっ♡♡声、でそうになっちゃう♡♡もしこれで他の人に見られたら……………っ終わる♡人生終わっちゃぐっ♡)

必死に両手で口を抑えるが、さっきまでイキそうだったナカをまた掻き回されて、いとも簡単に絶頂の波が押し寄せてくるのが分かる。

強すぎる快感に、口を塞ぐ手の隙間から、ふーっ♡ふーっ♡と息が漏れ出てしまう。

「ふ、ん♡ん♡ん♡~~~~~っ」

「そうそう。頑張れ頑張れ♡」

先輩はどこか楽しそうで。腰の動きは止む気配はないどころか、小刻みに速くなってきた。

「ふ、うづっ……♡ん♡ん♡ん♡うづっ♡♡」

（またおちんちんに、弱いところ狙われてるっ♡だめ、このままじゃイクっ、イグっ♡早く、早くっ、立ち去って……っ♡♡じゃないとえっちな声…、聞こえちゃうぐう♡♡）

「まだ、部屋の前に一人いるな…。このままイったら……入社したばっかりのお前が、会社でセックスしてあんあん喘ぐすけべ女だっ  
て分かつちやうかもな」

「~~~~ふーっ♡ふーっ♡」

「もうイきそうなんだな。ナカがビクビクしてきた♡……いいぞ、  
頑張って声抑えながら………イけ♡」

ずちゅううづっ♡♡

「ふづ、うづう~~~~っ♡♡」

ガクッ♡ガクッ♡ガクンッ♡♡

もう我慢することができず、絶頂の瞬間、口を塞ぐ両手に力を込める。

なんとか声は抑えることができたが、腰が跳ね上がってしまい、ガタンッと机を揺らしてしまった。

「えっ、やっぱ誰か使ってる？」

「……………っ」

（っふ…♡ど、どうしよう、変に思われちゃった……？）

外に立っている人も物音に気がついたみたいだった。ピクピクと絶頂の余韻が残りつつも、バレてしまわないか体を硬くさせる。心臓がバクバクして、半泣きになりかけたその時。

「お待たせー。よく予約みたら広報部で入ってたわ。ごめん、見逃してた」

「あっなんだ。さっきも物音したから、会議中なんかも」

「だね。ほかの会議室とったからそっち行こ」

そうやり取りが聞こえた後、コツコツと廊下を歩く足音が徐々に遠ざかっていった。

「……………はあ、よ、よかった…♡」

「行ったか。ちゃんと声抑えてえらかったな」

「……………っふ♡……………先輩」

「お前がイった瞬間ナカの締め付け凄かった……………搾り取られるかと思っただよ。弱いところとんとんされて…誰かに聞かれるかもしれない状況で…興奮しながらイクの気持ちよかったか？」

「…………っ、~~~~♡そ、そんなこと…」

「は、本当か…？まあいいか。……それじゃ、また続けるから、っ  
な」

どちゅっ♡

「へ、あ……？あ、あ~~~~♡♡」

おちんちんの動きが再開して、ナカをまたこすりあげられる。突然の事に間抜けな声を出しながら、足がピーンと伸びてしまった。

「だめ、まだっ♡いった♡いったばかりだからあっ♡」

「春菜は連続イキ出来るだろ？何回でもイけばいい……♡っ、あゝ、  
いったばかりのまんこすごいな…」

「これだめっ♡刺激、っ、っよすぎるっ♡敏感になってるおまんこ、

また、つかないでえっ♡♡」

まだ痙攣している膣をわり開くように、無理やりおちんちんが抜き差しされる。

いったばかりの体にはこの快感は毒で、頭を振り乱して先輩に訴える。

「ひうぐうぐっ♡♡♡だめ、だめだめっ♡♡またすぐイグっ♡」

「よわよわまんこだもんな。だめだめって、何がダメなんだ？ん？昔も口だけで……本当は連続イキされるの大好きだったくせに」

「っ、~~~~♡♡」

「はあ……、やばい、俺もイきそうだ……っ♡」

そう言っって先輩の動きが、精子を出すためのものに变化していく。ずちゅ♡ずちゅ♡と音をたてながら、体を揺さぶられて、何も考



えられなくなる。

「あ~~~~~♡だめ、っおちんちん、ゆるしてえ……っ♡」  
「っあ……♡相変わらず、かわいい……。あーやばい、もう出そ……」  
「ふ、ぐんぐんっ♡♡あっ、あぁっ♡おちんちん、動き早くなった  
あっ♡い、イクために、おまんこ、ごしごしされてえ、使われて  
りゅっ……♡」

「はっ、あ~~~~♡またナカ、ビクビクしてるな？俺も出すからっ、  
お前もまたイケ♡っ五年ぶりの精子受け止めろ♡♡」  
「あ、はああぁっ♡だめ、だめ、またイグっ♡」

もう気持ちいいということしか分からない。

込み上げてくる快感を我慢せず、絶頂しようとしたその時。

先輩が私の両足を抱えて左右に大きくわり開いた。それにより更に先輩と密着し、より奥におちんちんを迎え入れてしまう。

ず、ずちゅうううづっ♡♡

「……っは、ひゅっ♡い、いぎゅ、びっ~~~~~っっ

♡♡」

「うっ、あっ出る、精子中に出すぞ……っあ♡♡」

どぴゅっ♡とぷとぷ……っ♡

「あ、あ~~~~♡あ、熱いので……っ♡♡」

先輩がぶるりと体を震わせると、勢いよくおまんこのナカに熱いものが注がれていく。まだきゅんきゅんと収縮する腔内にドプッ♡ドプッ♡とねっとりと濃い精子を叩きつけられ、その感覚にも軽くイッてしまう。

「……っふ、う、うづっ♡」

「~~~~っはぁ。………はは、まだ甘イキしてるのか？」

「………っ♡♡」

強すぎる絶頂に耳元でキーンと耳鳴りがする。

呆然と虚空を眺め、荒い呼吸を繰り返していると、先輩のおちんちんがずるりと抜けていった。